

< 「生駒」の語源・由来については、この文書のP. 4に記載の「五、縄文に遡る伝承地名を解く」に集中的記述があります。 >

## 進藤 治「縄文言語からのアプローチ 『長髓彦』の実像」 <抜粋>

(見出し以外の太字は引用者による)

### 二、登美の長髓彦のこと

▲「登美の長髓彦」の「登美」とは何所で、どういう意味なのでしょう。

人名に土地の名を冠して呼ぶ習慣からすると長髓彦が本貫としていた地名だと言えそうです。

生駒山脈に平行して其の東方に低く南北に連っている矢田丘陵の東麓を限るように北から南に流れて法隆寺の南の安堵村あんどむらで大和川に合流する「富雄とみお川」の水源地帯が「登美とみ」にあたると考えられています。

奈良時代には登美郷と呼ばれ、平安、鎌倉、室町から江戸期の各時代を通じて「鳥見庄とみのしょう」という地名が伝えられて来ました。

大和のあちこちに金鵝神話に基く伝承地の争奪戦があり、複数の「トミ」が存在していて、夫々に其の正当性を主張していますが、一応定説としては此の近鉄奈良線富雄駅より北方の富雄川上流一帯が「登美」だとされており、他の「トミ」と比べてみても妥当性が高いようです。

何を確かな根拠としてそう断定したのかはよくわかりませんが、此の富雄川の源流に注ぎこんでいた白谷しらたに川(宅地開発工事で消滅し、下水溝と化してしまった。)という小川の奥の白谷しらたにという集落が長髓彦の本拠ということになっていて、戦中の紀元二千六百年記念事業で奈良県庁が建てたという立派な石碑迄現存しています。

多分、旧事紀の饒速日東遷伝承に語られている、「則ち大倭國鳥見白庭山おおやまとのくにのしらにわのやまに遷り坐す。」というくだりの「白庭山」にこの白谷を比定したのでしょう。

巨大資本系列の不動産会社による住宅団地開発の大波がこのあたりを席捲し、山野のたたずまいが凄じい勢で完膚無き迄に破壊されてしまいました。

しかし、以前のこのあたりは生駒山東方の矢田丘陵が北へ行くにつれて次第に低くなり、やがて切れ切れの小丘となり、其の間に**大小様々な谷や野が入り組んで、いたる所から清冽な湧水が流れ出して富雄川の源をつくり出していた美しい土地**でした。残念ながら、今ではそのような平和で、穏やかな、縄文的とでも云うべき風土を想像することは不可能になってしまいました。

約二百万年前頃から始まった最後の地質時代の第四紀更新世に生じた六甲変動と呼ばれる地殻変動が造り出した生駒山系はすべて美しい花崗岩の山々です。以前は綺麗な湧水が岩壁から惨み出して小さな泉となり、其の水が野の草を浸して繁茂した雑木の林を縫うように流れ出している光景をこの登美のあたりでもよく見かけたものです。

縄文の昔にはさぞや**沢山の鹿、猪などの狩猟獣の群がこのあたりを彷徨**ほうこうしていたことでしょう。**なだらかなスロップ、本の実の豊かな森、美しい湧き水が点在するこのあたりこそ生駒山系随一の狩場**であったに違いありません。まさにこの登美の地は縄文晩期を飾る英雄を育はぐむのにふさわしい土地だったのでしょう。

### 三、縄文期に遡る古い地名のこと

▲「登美」とはどういう意味なのでしょう。本来の音に宛てられた漢字の「富」や「鳥見」の意味をこじつけ気味に解釈してみた所で全く無意味です。トミの表記がいろいろ変って来たこと自体、宛てられた漢字に大した意味が無かったことを示しています。そして**漢字渡来の時点で既に「トミ」という音韻の地名が存在していた**ことを想像させて呉れます。

▲石切劔箭神社が鎮坐している地域はまさしく神武東征伝承に記載されている古戦場の「孔舎衛坂くさへのさか」(衛は衙の誤字といわれている。従ってクサカの坂が正しく、実際にクサエの坂という地名は存在しない)そのものである……。

▲このような古い、**縄文期に迄も遡る伝承地名として前記のトミ、クサカ、シラカタ等をその山系の東西山麓に持つ生駒山の「イコマ」**も一考に値します。

▲「生駒」という漢字が宛てられるようになったのも比較的新らしい時代からのようで、それ以前には「瞻駒（書紀）」「伊古麻（生駒山口神社）」等があって、漢字の用字がいろいろと変化して来たことがわかります。従ってこの地名も宛てられた漢字の意味どりとは無関係に、ずっと古くから「イコマ」と発音する地名が成立していて、何らかの、もっ具体的で説得力を持つ起源があったのだと考える方がずっと自然です。この山系には古くは一万年もの大昔から人々が住みつき、かなり濃密な遺跡を残していますので、馬が渡来して来たと考えられる弥生時代の何時頃か迄、八千年以上にも亘って馬という動物を全く知らなかった人々が生活し続けて来た訳です。そういう人々が馬に因んだ地名などつける訳が無いし、**縄文人的生活の重要な舞台だったこの目立つ山を無名のまま、ずうっと放置していた等ということもとうてい有り得ない**ことでしょう。古墳期遺跡からの馬骨の発掘資料等もあるので決して西麓における馬の放牧飼育を認めない訳ではありませんが、イコマという地名の起源という問題では、きっと、何らかの、確かな意味があって遙かな縄文の昔から馬の飼育、放牧以外の意味で、「イコマ」と呼ばれ続けて来たに違いありません。

#### 四、縄文言語についての一つの想像

それでは古い伝承地名の音韻を遺した、縄文人たちが話していた言語とは一体どのようなものだったのでしょうか。

狩猟、漁撈、採集、それに石器利用という縄文文化が列島全域に薄くひろがっていた所に、稲作農耕、金属利用を特長とする弥生文化が日本列島を西から東へ、あるいは南から北へ、凡そ二千年もの時間をかけて、ちょうど刷毛で掃くようにゆっくりと、例えば青い縄文の色を、例えば赤い弥生の色に塗りかえるように浸透して行ったのが日本の歴史である、とも言えます。

そのような歴史を遡って行くとどうしても縄文人の影像が、被征服民として史書に登場してくる「蝦夷えみし」の姿と二重写しになってしまいます。

先にも触れたように、(引用者：日本書紀に記されている)神武東征軍の久米歌に、**大和の先住民を指して「愛瀨詩えみし」**と呼んでいました。そのことはずっと後世の歴代朝廷に踏襲されまして、遠い縄文時代から日本列島に住み続けて日本の国の基層文化を形成した先住民を一貫して「「蝦夷」と呼び、朝廷に従わぬ者は「まつろわぬ者」として征服し、支配して来ました。

今迄みて来た**縄文期からの伝承地名等が、現代日本語の直接の古語である大和言葉ではどうにも解釈ができない**ことが明らかになってくると、何とかしてこの蝦夷と呼ばれた先住民たちが話していた言葉を探り出す必要が生じて来ます。

そのために、ここで一つの仮説をたててみることにします。そして以下、その仮説を順を追って簡単にお話することにします。

最近、日本文化の基層の研究が盛んになり、目覚ましい成果を挙げています。その結果、これ迄日本語とは全く異質の言語で、何の親縁関係も存在しないとして無視されて来たアイヌ語が見直され、大きくクローズアップして来ました。

今迄アイヌ語が日本語の系統論の研究の中で完全に無視されて来た原因は、高名なアイヌ学者でアイヌの古典歌謡ユーカラの研究の第一人者である金田一京助博士や、その直弟子でアイヌ民族出身の一大秀才と謳われた知里真志保教授、そして久保寺逸彦教授等、東大系のアイヌ語の最高権威と云われた人々がそのように断定してしまったからなのです。

その理由は主に日本語が膠着語であるウラルアルタイ語系の言語だと思われていたのに対して、アイヌ語が抱合語という全く異質の言語系統に属する言語だと考え、両語の相違点ばかりを論じて来たためでしょう。

今でも言語学界ではそういう考え方をする人々が主流になっているようですが、最近の活潑な研究活動が大きい変化を起しつつあるようです。

金田一氏の主張通り、アイヌ語がもし抱合語なのであれば日本語の古語も抱合語であると云わざるを得ない点が多々ありまして、もっと大きい視点から眺めると両語の間には共通点の方が多くいろいろと判明して参りました。

安本美典氏の、基礎語彙の一致が偶然によって起きる確率を調べて言語間の距離を求める、統計学の方法による分析比較でも、世界中の言語の中で日本語に最も近い言語がどうしてもアイヌ語になってしまうという結果が出るということです。

また、アイヌ語と日本語の間の夥しい数に上る共通語が、金田一氏によって簡単に、すべて日本語からの借用によるものだと片付けられて来ました。

しかし、普通、借用関係が生じるのは名詞に限られて、動詞に借用関係が起こることは言語学の上では先ずあり得ないこととされているに拘らず、不思議なことに両語間の共通語とされているもののうち、圧倒的に動詞が多いという現象の説明がつかないことになるのです。

更に**出雲系神話とアイヌ神話の類似、古代神道とアイヌ宗教や信仰儀礼との類似**、更にはそれを表現する語彙の基本的な一致等、金田一氏等の従来の主張の根拠がすべて覆えてしまいました。

そして、アイヌ語は今や日本語と同祖、同系統の、極めて近い親縁関係にある言語として脚光を浴びるようになって参りました。

仮に、アイヌ語の祖語も含めた古い言葉が日本列島中に薄く、広く分布していて、そこへ朝鮮半島から、あるいは中国大陸から新しい文化を待った人々が、新しい言葉を持ちこんで相当大量に移り住んで来たと考えれば、この古い先住の蝦夷たちの言葉が新しく入って来た弥生人たちの言語によって大きい影響を受け、弥生的文化の拡大につれて大変革を遂げていわゆる、和語、あるいは大和言葉となって行ったことになる訳です。そして、純粹の古い蝦夷語の通用範囲がどん

どん北東方面に追い上げられ、狭められて行ったのだと思われまます。

やがて二千年の歳月が経過して、**北海道にだけ蝦夷語のレリック**（引用者：残存種）**としてのアイヌ語が残ることになったのだ**と想像されるのです。

このような仮説で日本列島における言語事情を考えて参りますと縄文言語との関連でアイヌ語が非常に重要な意味を持つてくることとなります。

この事について、最近、東大自然人類学教室の埴原和郎教授らの、豊富な人骨資料を駆使しての「多変量解析法」によるコンピューター測定で、人種間距離の測定図表が作成されて（添付図表資料八二、八三頁）〈→引用者：略〉、自然科学の分野に於ける研究の結果でも仮説の主旨と矛盾しないことが立証されました。

この図表によると、寒冷地適応を受けていない古モンゴロイドである縄文人から、アイヌ人も、和人も、夫々別の方向に小進化したものであること。

**アイヌ人は縄文人の純粋度を濃厚に保ちつつ、今尚いぜんとして古モンゴロイドの範囲内に留まっていること。**

一方、和人は寒冷地適応済みの新モンゴロイドである、大陸系北方民族と相当量の混血を経て、次第に新モンゴロイド化する方向に小進化した現在に至ったものであること。

等が明確に立証できるのだそうです。

言語の関係を此の人種間距離測定図表に重ねてみるとどうなるのでしょうか。

**縄文人の言語、つまりエミシ語からその純粋度を濃厚に保ちつつ古モンゴロイドの範囲に留る程度の小進化をして、ほぼ質的な変化を見せなかったものがアイヌ語**であり、一方エミシ語から小進化して行く過程で北方系大陸諸言語（ウラル、アルタイ語系）の大影響をうけてエミシ語からかなり遠く離れてしまったような変化を遂げたものが和語—日本語だった、ということになって、エミシ語、アイヌ語、日本語の関係が具体的に納得できます。

このことから、日本語よりもアイヌ語の方がエミシ語の面影を濃厚に留めていて、ずっと多くの共通部分を持っている筈だと推定できます。つまり**アイヌ語はエミシ語の純度を濃く継承**できる地理的条件の中で、無菌に近い状態で純粋培養されるという小進化の過程を経て今日に至った言語であるとも言えるので、古代エミシ語を復原して行く上で大変重要な手がかりとなってくれる筈なのです。

大和朝廷のおひざ元である此の石切劔箭神社を中心とした地域においても征服王朝の側から「愛禰詩」と呼ばれた先住民が古くから住んでいて、幾つかの伝承地名等の固有名詞を残し、その意味や語源が和語ではどうしてもすっきり説明できかねるということが判明しました。

これらがすべてエミシ語に由来するものならば宛てられた漢字や、定説等に惑わされることなく、すべて音韻本位に考察し、エミシ語への重要な手がかりとなる筈のアイヌ語と対比しつつ解き明かして行けば或程度納得の行く結果が得られる上に、幻の縄文語、エミシ語の輪郭が少しでも明らかになって行くのではないのでしょうか。

## 五、縄文に遡る伝承地名を解く

さて、いよいよ本論に入ってエミシ語で呼ばれたものと考えられる古い地名を解明して行くことになります。

その由来や意味がよくわからなくなっている**伝承地名の典型として生駒山の「イコマ」**を先ずとりあげてみましょう。

「イコマ」をイ・コマと発音するのは、宛てた「生駒」という漢字の訓法通りの発音を基礎にしたからだと思われる。原初の発音がイ・コマではなくてイコ・マであった可能性を考えるべきでしょう。そのような発想でこの地名を考えてみると次のような展開でアイヌ語の感じになって行きます。

**イコ、マ=イク、オマ=ユック、オマー (yuk - oma)**。則ちこの音韻をアイヌ語としてとらえると《**鹿ユックが、そこにいるオマー (群れている)**》という意味になります。

馬の放牧飼育などではなくて、生駒の本来の意味が右のようなことでしたら関西地方でも特に濃密に、その山系全域に亘って縄文遺跡が存在している山系の名にふさわしい、いかにも縄文人が名づけたらしい地名としての説得力が感じられて来ます。

その上、アイヌ語の地名としても極めて自然で妥当な語彙構成をしていて、アイヌの古い語法で物の存在を表現するのに用いられたというオマー (oma) (知里真志保著、地名アイヌ語小辞典、oma 項参照) という語が何よりも古い地名表現をする語彙としての自然な感じを付与してくれています。

**水の豊かなこの山系一帯の、木の実の豊かな雑木の原始林には鹿や猪などの狩猟獣が沢山棲息し、縄文の狩人たちにとって此の「イコマ」の山は四季を通じて獲物の宝庫だった訳で、とにかく山に分け入って一所懸命に狩りさえすれば山の幸が必ず授かって、人々は飢餓におち入らずに済んだという有難い山だったのでしょう。**

誰が言うともなく、この山を「鹿がそこにいる」山、則ち「ユック鹿が、オマーそこにいる」山。イク、オマ=イコ、マの山と呼ばれるようになったのでしょう。

そしてこの具体的で簡明直截な表現が人々のコンセンサスを獲得し、地名として定着して行ったのではないのでしょうか。

このような地名は、一度生れるとほぼ無条件に後世に継承されて行くことになります。時代が移って新しい文化と言語を待った人々が幾波にも亘って此地に入りこみ、定着して、当然この土地で話されていた言語も大きく変化し、地名発生当時の言葉が全く通用しなくなってしまうますが、古い時代から語り継がれて来た「イコマ」という山の呼び名は、既に固有名詞として確定してしまっており、一種の符牒として、意味が通じなくなってしまうに拘らず忠実に後世の人々に伝承されて行ったもらと考えられます。

こうして何千年にも亘って「イコマ」と呼ばれた山の名を、漢字で表記しようという日が来て、遠い昔に縄文の人々が「イコマ」と呼んだ意味、由来等、誰一人として記憶している者もないままに、「伊古麻」「瞻駒」「生駒」等が時代の変遷によって適当に宛てられて現在に至った訳です。

もし、そうだとすると「イコマ」という音韻はアイヌ語のユック、オマー《鹿がそこにいる》という言葉に近似した音韻と意味を待った、少くとも縄文期の何時の頃からこのあたりにも分布していたエミシ語の片鱗を示して呉れている貴重な伝承地名だということになります。

それでは生駒山西麓の、日本書紀にでて来た「草香邑青雲白肩之津くさかのむらのあおぐもしらかたのつ」のクサカ、シラカタはどうなのでしょう。

同じような方式でアイヌ語に比定してみるとクサカは、クサ、カ (kusa - ka) 《舟で運ぶサ (水域を渡る)、岸ツ》。つまり荷舟を着ける岸ということから「舟着場」という意味になります。

またシラカタはシラる、カタ (Siral - kata) 《岩だらけのシラる、上の方カタ (舟をつける陸地の意、舟から見て視線が上の方に向く岸)》、ということになって、矢張り舟着場に関係がある岩だらけの磯を思わせる具体的な地形特徴を表現していることになります。

日下貝塚遺跡の存在で縄文期からの聚落が存在していたことが立証されているこの日下という地域が水辺に臨んでいて、舟運が栄えていたことを物語る地名だったことになります。

また、生駒西麓の扇状地の先端は、西側の急斜面が流し落とした岩石が散乱しており、現在でも道路工事等で少し掘り起こしただけで大小の岩石がごろごろ出てくる場所もあるということで、そういう岩石が荒磯を形成していた光景が充分想像できて、このような地名が縄文人たちによってつけられたことが容易に納得できます。

しかし、ここに一つの問題が生じます。それはクサカとシラカタの関係です。

クサカは《舟で運ぶ岸》という意味にすぎず、単にその土地が果している機能表現しているだけの抽象的な地名ということになります。

一般的に地形その他の事物の、具体的な特徴を表現してその地名を特定するというので、何人にもその地名の場所を他と紛れることなく正確に認識させる機能を持っていたアイヌ語的地名としては、やや、異例なものという感じになります。

つまり、特にクサカそのものを指すというよりも、普遍的に舟着場一般を意味することになってしまう訳ですから、舟着場でさえあればどの場所であっても構わないというような、少々漠然とした印象になってしまうのです。

一方、シラカタの方は《岩だらけの着岸地》というような意味どりと成り、いかにもアイヌ語的地名らしい具体的な表現が伺えます。そしてその場所も具体的に何処のことなのか正確に特定されている感じがあります。

日本書紀の表現をみると、「草香邑青雲白肩之津くさかのむらのあおぐもしらかたのつ」となっているので、同じ日下くさか地区のことを指してはいても少しニュアンスが異なることがわかります。「草香邑くさかのむら」が何となく広い区域を指し、その区域の中に含まれる、ある特定の狭い範囲を指して「白肩之津しらかたのつ」と呼んでいたことがわかります。

アイヌ語的地名解釈をこれにかぶせてみると一層この点が明瞭になって来ます。

アイヌ語的地名解釈をこれにかぶせてみると一層この点が明瞭になって来ます。

要するに、「クサカ」という土地が持つ機能を表現するに留まっている、普遍的な地名が草香山の麓一帯のテリトリー全域を指し、「シラカタ」という地形特徴を具体的に表現し、特定化した地名は、そのテリトリーの中にある岩礁や、荒磯の存在で誰にでもすぐ、それとわかる一つの舟着場の磯を指していたのだろうと考えます。

つまり、現代の例でいえば「神戸のメリケン波止場」「大阪の天保山棧橋」といったような感じになるのかも知れません。

さて、次に**登美の長髓彦の「トミ」**はどうでしょうか。

地形的特徴をあらわすアイヌ語的伝承地名にならない解釈の仕方もありますが、一応の比定は可能です。

登美とみ、ト、ミ=ト、ミむ=**ト、メむ to - mem** <sup>ト</sup> <sup>メ ム</sup>《池、沼の（水の）、湧き出し口（泉）》というような意味を表現する地名になります。

富雄川上流の、あるいは白谷付近の古代の地理的特徴を表現し、特定するアイヌ語的地名らしさがあります。

富雄川源流地帯の縄文の狩人たちのベースキャンプになっていた、獲物の豊かな「トミ」の地の、泉のほとりのとある集落の光景が目には浮かんでくるようです。

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記URLをクリック)に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>

**「生駒」の語源・由来**については、**生駒検定** <問 1 7> **「生駒」の語源・由来** の問題文と解答・解説 (下記URLをクリック)

もご参照ください。

<http://ikomakentei.seesaa.net/article/428582835.html>

**登美の長髓彦の「トミ」の語源・由来**については、「トビ・トミ=ナガ=蛇神=化して鳥（トビ）」(下記URLをクリック)

もご参照ください。

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2015/09/post-92a4.html>

**長髓彦**については、**長髓彦** (ナガスネヒコ/ナガスネビコ) について (下記URLをクリック)

をご参照ください。

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2015/07/post-bec1.html>